

むかしの高松

'94/12
第5号

“特集 米作りの歴史を探る”

秋の田の 穂向き見がてり

我が背子が ふさ手振りける

おみなえし
女郎花かも

大伴家持（『万葉集』巻第17 3943）

10月。一面に広がる水田は、こがねいろ黄金色にかわり、こうべ稲穂は重く頭をたれています。日本人の食生活の中で重要な位置を占めてきた“米”。古来、人々はあらゆる困難に立ち向かい、全力を注いで米作りを行ってきました。私たちが住んでいるこの高松平野でも、その努力の跡が地中から次々と発見されています。

では、「むかしの高松」第5号というタイムマシンに乗って、米作りの歴史をたどってみましょう。



※現在の米作り※

今日の水田は、大規模な区画整理によって整然とした長方形に整えられ、畦畔ひいはん（あぜ）や水路はコンクリートで造られています。農作業はトラクターやコンバインなどによりほとんど機械化されています。



※鎌倉時代の米作り※

タイムマシンは今から700年前にタイムスリップしました。

この時代の水田は、現在まで残っている条里制*の水田とほぼ同じで、碁盤目状に区画されていたと考えられています。しかし、高松平野では非常に小さな水田が発見されました。水田1枚の面積は2~20m²です。水田は、広い範囲にわたって営まれていたと思われませんが、発掘では旧河道（弥生時代の川）の埋没したわずかな低地のみに畦畔の高まりが残っていました。この水田は一見すると不規則ですが、よく観察すると条里制の区画に基づいていることがわかります。



条里制—古代の土地区画制度。土地を道や用水路で一町（約109m）四方の碁盤目に区画した。

※平安時代の米作り※

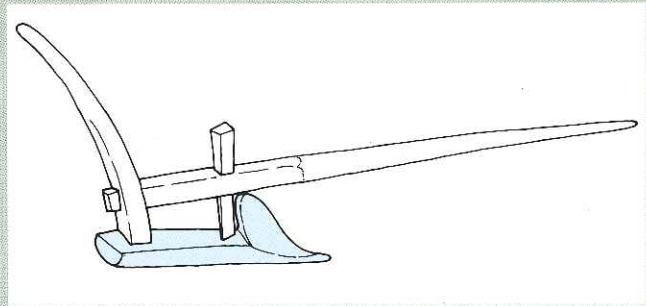
タイムマシンは、約1100年前の平安時代にタイムスリップしました。

この時代には、律令国家が成立し、条里制が全国に施行され、高松平野も碁盤目状に区画されていたことでしょう。実際、日本で最古の絵図である『弘福寺領讃岐国山田郡田図』^{ぐふくじ}は、今の林町付近の区画された耕地の様子を描いたものです。整然とした区画された条里型水田はまだ発見されていませんが、旧河道が埋まったわずかな低地に畦畔（あぜ）で区画された小さな水田が見つかりました。



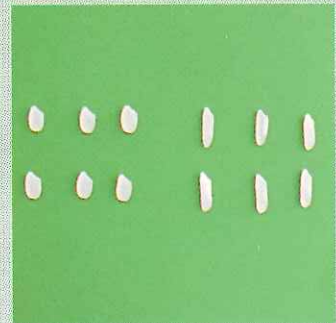
カラスキ（犁）

坂出市下川津遺跡より出土した7世紀の犁（青く塗った部分）です。牛に引かせて土を耕すもので、古代における畜力利用の農耕を示す証拠です。



米の品種

米は大別すると3種類に分かれます。粒長が短く幅の広い～丸い形～ジャポニカ、粒長が長く幅の狭い～細長い～インディカ、両者の中間的なジャバニカです。日本に伝来したのは、このうちのジャポニカで、現代まで私たちの主食となっています。



※古墳時代の米作り※

時代はさらに遡って、今から約1400年前の古墳時代後期にタイムマシンはやってきました。

この時代の水田は全国的にもあまり発見されていません。高松平野では1ヶ所だけ発見されています。水田は、旧河道が埋没してできたわずかばかりの低地の中にあり、小さな畦畔（あぜ）に囲まれた碁盤状の水田です。水田1枚の面積は約8㎡で非常に小さなものです。北側には石を集めて造られた石組みの畦畔があります。



もくひ 木樋

古墳時代の水田面直下の溝から出土した木製の樋といです。半分に縦割りした丸太をくり抜いたもので、工具による加工の跡が見られます。



畑

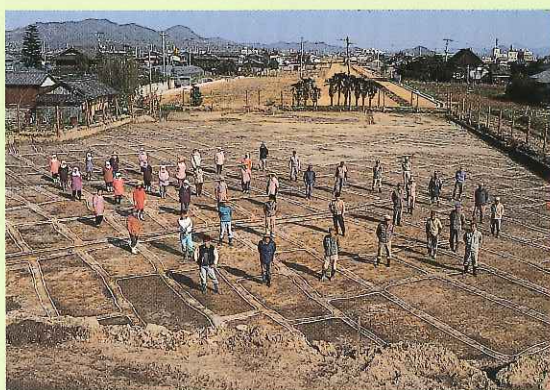
かえるまた 蛙股遺跡では、奈良時代から平安時代にかけての畑が検出されました。水田と同時に畑作も行われていたのです。そこでは陸稻おしかばか野菜が栽培されていたのでしょうか。



※弥生時代の米作り※

タイムマシンは、弥生時代までタイムスリップしました。

中国大陸から北九州に伝わったコメは、急速に各地へ広がっていきます。高松平野でも弥生時代前期以降の水田が見つかっています。水田は定形小区画水田といわれる小さなもので、幅20～30cm、高さ5cmの畦畔（あぜ）によって区画されています。一枚の水田は長方形で、平均の面積は10m²です。畦畔の一部が途切れ、配水されるようになっています。水田の枚数は、^{まご}浴・長池遺跡で24枚、^{まご}浴・長池Ⅱ遺跡で315枚を数え、大規模な開発が行われたのでしょう。





農具

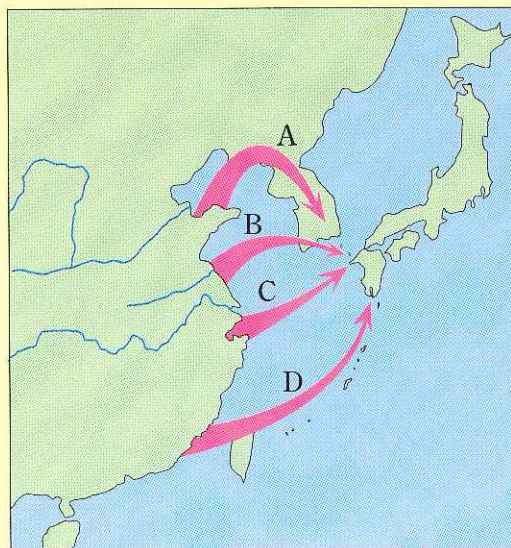
水田の開田や耕作の道具として、いろいろな形をした木製の鋤くわや鋤すきがあります。

収穫脱穀具

実った稲穂を摘み取るのが石包丁。収穫した米を脱穀・精米するのがたてうす・たてきねです。その使い方は月のうさぎがもちをつく姿をイメージしてください。

※米作りのルーツ※

今から8000～9000年前、中国大陸の揚子江中流から下流の一帯において米作りが発生し、約2400年前に日本に伝わってきました。その経路としてA～Dが考えられています。Aは朝鮮半島北部を通るコース、Bは半島南部を経由するコース、Cは直接伝わるコース、Dは南方コースです。今、有力なものはB・C説です。米作りの技術だけでなく、それに関連するいろいろなものも同時に伝わり、弥生文化が成立したのです。



※水田の移り変わり※

弥生時代から現在までの水田の変化を簡単に説明しましょう。

水田は、その形から次のように分類できます。

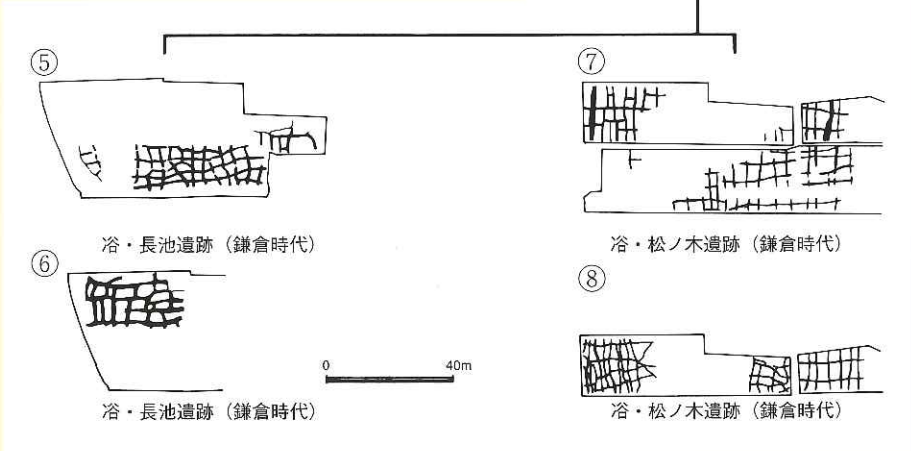
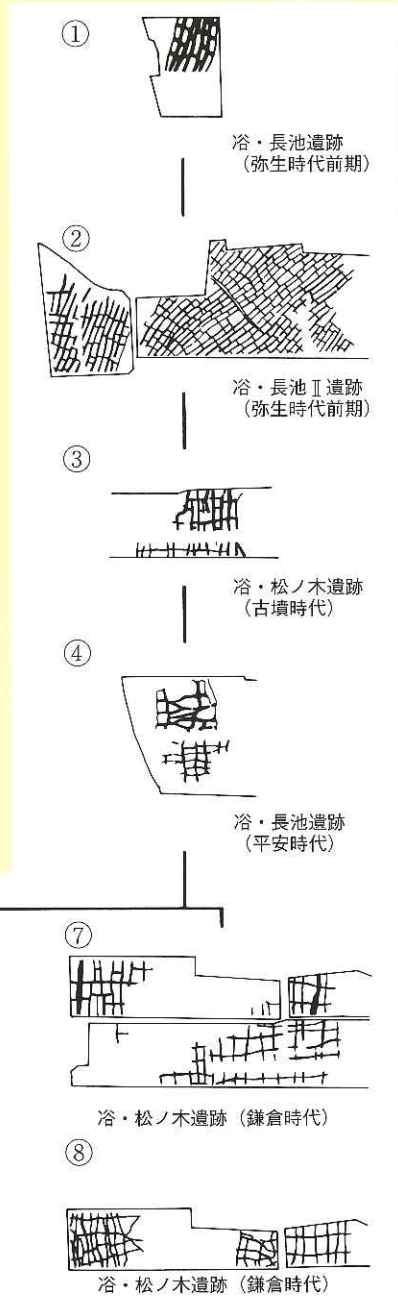
- ├ 条里型水田 (1)
- ├ 大区画水田 (2)
- └ 小区画水田 ─┬ 緩傾斜面に区画した水田 (3)
- └ 平坦地で碁盤目状に区画した水田 (4)

弥生時代の水田(①②)は、小区画水田の(3)です。この時代の水田は「完成された水田」と言われています。検出された水田は、水平面を保つため等高線に沿って畦畔を作っています。また、^{くわ} 鋤や^{すき} 鋤をはじめとする農耕具も出土しています。配水方法は、畦畔の一部を切る^{みなくち} 水口式とわずかに低い短辺の畦畔を越えて水を流す^か 掛け^{なが} 流し式があります。

古墳時代の水田(③)は、(4)の水田です。地形の変化に制約されながらも碁盤目状に区画されています。

奈良時代から現在に至る水田は、条里型水田(1)です。しかし、検出された鎌倉時代の水田(④~⑧)は、一町方格を基準とした条里型の水田とは様相が異なる小さな区画です。畦畔の方位が条里地割と同一なことから、条里型水田の一種であると考えられます。このような形になった原因としては、地下水の低下と保水機能の悪い土壌があげられます。

中世半ば以降は大区画の条里型水田となり、区画整理以前の水田に至る長い間にわたって連綿と受け継がれていきます。



※顕微鏡の中の歴史※

地層の中にはいろいろな情報が残っています。昔の水田のあとを認定する方法にプラント・オパールの分析があります。これに関して研究しておられる皇学館大学（三重県伊勢市）の外山秀一先生にお話を伺いました。

Q. プラント・オパールとは何ですか？

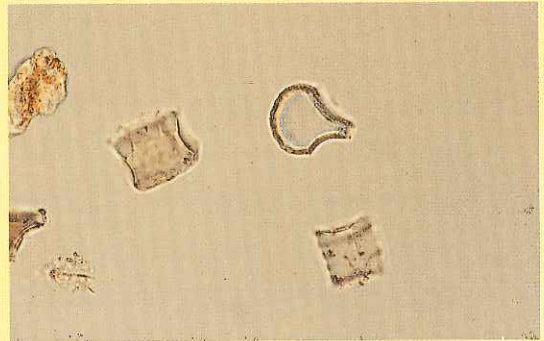
A. 植物の中には植物珪酸体しょくぶつけいさんたいと呼ばれる小さなガラス質の細胞があり、これが化石となって地中に残ったものをプラント・オパールといいます。

Q. どのようにして分析するのですか？

A. まず試料を細分された地層ごとに採取し、何度も水洗いして乾燥させた後、プレパラートにして顕微鏡で観察します。そして、プラント・オパールの形の違いで植物の種類を判断するのです。

Q. どのようなことがわかるのですか？

A. 過去の植生環境の復原、すなわち過去にどのような植物が生育していたかを明らかにすることができます。また、稲作をはじめとする農耕の歴史や土地条件の変化、土地利用の違いなどがわかります。



イネのプラント・オパール

編集後記

タイムマシンは現在に戻ってきました。米作りの歴史を探る時間旅行はいかがでしたか。

今号は、最近いろいろと話題になっているコメについて特集しました。コメが日本に伝わってから約2400年の間、私たちの祖先はたゆまぬ努力で米作りを行ってきたのです。このような歴史を学び、より広い視野に立って稲作の問題について今一度考えてみましょう。(N)

むかしの高松 第5号

1994. 12. 1

編集／高松市教育委員会文化部文化振興課

高松市番町一丁目8番15号

☎(39)2636

発行／高松市教育委員会

印刷／(株)中央印刷所